論文の内容の要旨

論文題目　　機能動詞結合の特殊性が日本語習得に及ぼす影響
―中国語を母語とする学習者を対象に―

氏名　岡嶋　裕子

1.　はじめに

「攻撃」「連絡」などの事態を表す名詞を動詞として用いるためには、機能動詞と結びつけて機能動詞結合としなければならない。機能動詞とは、「攻撃する」「連絡する」のスル動詞及び「攻撃をかける」「連絡をとる」の「かける」「とる」などの支援動詞である。事態性名詞の多くはサ変動詞の語幹となるもので、日本語になくてはならないものである。

機能動詞結合を用いた文は、「動詞ではなく、参与する事態性名詞が、第一義的な意味フレーム想起要素（frame-bearing element）となる」（藤井・上垣:2008a）ため、他の一般的構文とは異なった文法的ふるまいをする。さらに、機能動詞結合にはイディオム性があり、動詞と名詞の結びつきが「個々の語彙の組成のみでは予測し」きれず（藤井・上垣:2008b）、日本語の習得において、特有の困難がある。にもかかわらず、機能動詞結合の習得研究は、現在、日本語教育では未開拓の分野である。

本研究の目的は、学習者が日本語を学ぶ際に、この機能動詞結合の特殊性がどのような影響を及ぼすのかを明らかにし、習得を促す方策を探ることである。そのため、学習者は日本語能力の向上と共にどのように機能動詞結合を習得していくのかの過程を調査した。機能動詞と結びつく多くの事態性名詞は漢語であることから、本研究では中国語を母語とする日本語学習者（CLJ）を対象として、作文分析及び実験を行った。

2. 作文分析

作文データは、オンライン上で公開されている３つのコーパスを用い、機能動詞結合か

どうかの判別は、藤井・上垣（2008b）の判別テストを用いた。

2-1 中級 CLJ

作文で用いられた機能動詞結合の正用率は中級 82.1%と非常に高かったが、頻度の高いやさしい結合を繰り返し用いていた。自信の持てない機能動詞結合の使用を回避、言い換えしたためと思われる。

タイプ別に誤用の占める割合を見ると、1) 非結合語 43%　2) 文法 36%　3) 用法 18% だった。これらの誤用は、いずれも機能動詞結合が有する特殊性から生じている。

1)「非結合語」とは、名詞と動詞の組み合わせが日本語にないものであり、それには名詞の誤りと動詞の誤りがある。

名詞の誤りには、日本語にない中国語の語を事態性名詞として用いたもの（a）と、一般名詞を機能動詞結合に用いたもの（b）があった。機能動詞結合を構成する名詞は必ず、事態を表すものでなくてはならない。

a.＊中国人は大変形式を注重します　　（重視します）

注）（　）は、正しいと思われる日本語を筆者付加

b.＊「来年ご健康いたします」とかとお祈りします。　　（健康でありますように）

動詞の誤りでは、「アドバイスをあげる」のように、伝達意図は伝わるが、慣用的でない動詞を名詞に結びつけたものがあった。中には、中国語の名詞と動詞の組み合わせをそのまま日本語に持ち込んだ例も多数見られた（c）。

c.＊人々の身体は仕事の疲労を受けるほかに、・・・・（後略）

≪人们的身体除了要承受工作的疲劳以外：下線部は日中で対応する語≫

2）文法上の誤用で最も多かったのは、機能動詞の欠如だった。

d.＊インターネットも広く応用られている。　　（応用されている）

d では、動詞抜きで事態性名詞に直接助動詞を接続して、活用させている。これは、日中で同形同義の漢語「応用」が、中国語では動詞であるので、日本語でも動詞扱いしたために生じた誤用と考えられる。

次に多かったのは修飾の誤用である。機能動詞結合では、事態性名詞「失敗」に、助詞「を」なしで動詞「する」が直接付き「失敗する」となると、一語動詞となる。にもかかわらず、一語動詞となった「事態性名詞」を名詞扱いして、連体修飾していた（e）。

e.＊私の失敗したことは興味がない学科を選びました。　　（私が失敗した）

ヴォイスの誤り（f）は、「中国語の心理動詞は具体的に使役形などを伴って表現されることが多い。」（吉永、201；175）ことから、日本語で心理を表す事態性名詞を機能動詞と共に用いる場合に、使役形や受身形の形をとってしまうものである。

f. ＊このドラマは悲劇ですが、ほんとに感動されました。　　（感動しました）

3）用法上の誤用（g）は、名詞と動詞の組み合わせは日本語に存在するが、文脈から判断して、他の機能動詞結合を用いるべきものである。事態性名詞に結びつく機能動詞は複数あり、どの機能動詞を用いるかは、文脈によって制約がある。

g.＊日本語学科を読みたいですから、私は再び試験しようと思います。

g の場合は、「試験する」ではなく、「試験を受ける」としなければならない

2.2　上級 CLJ

機能動詞結合総数の中で正用が占める割合は、上級も 80.6%と、高い正用率を示していた。機能動詞結合の使用延べ数も、中級と違いがなかったが、上級は異なり数の占める割合が有意に高く、多様な機能動詞結合を使い分けていた。

表１　誤用タイプ別割合

誤用タイプ	上級 CLJ	中級 CLJ
非結合語	53.7%	43.4%
文法	13.0%	35.7%
用法	33.3%	18.2%
理由不明	0	2.8%
総誤用	100%	100%

誤用内容にも上級と中級で違いが見られた。表１は、上級と中級それぞれに、どのような誤用タイプが多かったのかを示したものである。上級になると文法的誤用が大幅に減り、文法的規則はマスターされていたが、かわって上級では用法上の誤用が増えていた。用法上の誤用は、上級になり、ある程度、機能動詞結合の蓄積が進んだが、事態性名詞に結びつける機能動詞をワンパターンで記憶して用いるため、文脈に応じて使い分けることができないことから生じる。

しかし、中級でも上級でも変わらず、非結合語が誤用の中で最も大きな割合を占めていた。名詞と動詞の組み合わせは慣用的で、規則性がなく、語彙習得と同様、膨大な組み合わせを１つずつ長い時間をかけて学んでいかなければならない。

3. 産出実験

実験では、国内の日本語学校に通う日本語能力試験 N1、N2[1]取得者 58 名を対象に、機能動詞結合を含んだ日本語文の動詞部分を空欄にした補充テストを行った。質問文には、ターゲットとする機能動詞結合の中国語訳を添えた。

〈テスト例〉　敵の激しい攻撃を（受け）、ローマ軍は多くの兵を失った。　［被攻击了］

実験では、作文分析とは大きく異なった結果が出た。第１に、上級 CLJ は作文では 80.2%と高い正用率を示したが、実験では 29.5%と大幅に低くなっていた。第 2 に、作文では上級と中級とで正用率に有意差がなかったが、実験では、N1 の正用率は 39.5%であるのに、N2 は半分の 20.1%で著しい差があった。作文で正用率が高かったのは、上級も中級もそれぞれの能力の範囲で自信のない機能動詞結合の使用を回避したためと考えられる。このように習得が遅れているのは、機能動詞結合は、聞く、読むなど受動的に接する分には理解がたやすいため、学習の対象と気づかれにくいからである。

実験では、頻度が高いもの、日本語の機能動詞結合と母語（中国語）での名詞と動詞の結びつきが類似しているもの、及び「影響を　与える／及ぼす／受ける」など事態性名詞と共に用いられる動詞の数が中程度のものの正答が多かった。

4. 機能動詞結合の習得と日本語能力との関わり

作文では、機能動詞結合の使用延べ数に違いはないが、上級になると異なり数が増え、

[1] N1 は旧日本語能力テスト１級、N2 は２級に相当する。

機能動詞結合を多様に用いるようになり、また文法上の誤用が減少していた。さらに、実験では、N1 の正答割合は N2 の 2 倍近くあった。また誤答内容を見ると、N2 はスル動詞のみを用いていたが、N1 は支援動詞が多く、さまざまな試みをしていた。以上から総合的に判断すると、CLJ の機能動詞結合の習得は、日本語能力が上がると共に着実に進んでいた。

作文では、上級になると用法上の誤用が増えていたが、それは習得の後退を意味するのではない。機能動詞結合の蓄積が増え、獲得した結合を実際の日本語の文脈で使おうと試みた結果であり、その使用を学ぶために必要な発展過程である。

5 機能動詞結合の特殊性が習得に与える影響

日中で同形同義の漢語は多いが、日本語の動詞には活用があるため、それを直接動詞として取り入れることはできない。しかし、機能動詞と結びつけることによってそれが可能になる。さらに、日本語で用いられる機能動詞は、「連絡を受ける」「許可を得る」の「受ける」「得る」など、受動を表すものが大きな割合を占めるが、「受」「得」を用いた機能動詞結合は、対応する中国語の名詞と動詞のペアと同形同義の漢字語を含むものが多く、母語知識を活用できる。このように、機能動詞結合は、語彙レベルを超えて大きな役割を果たし、CLJ の日本語習得に大きく貢献していた。

一方、機能動詞結合の特殊性は、名詞と動詞の非慣用的組み合わせ、事態性名詞の直接活用、助詞「を」なしで名詞と直接結びついた一語のスル動詞結合への連体修飾など、特有の誤用を引き起こしていた。しかし、このような文法的誤用は日本語能力が上がると共に習得されていく。上級になっても残る問題は機能動詞結合の量的蓄積と、その文脈での使用であり、そのための教材が必須である。

参考文献

藤井聖子・上垣渉（2008a）「支援動詞構文の分析：コーパスに基づく構文理論的アプローチ」『言語処理学会第 14 回年次大会発表論文集』、943-946.

藤井聖子・上垣渉（2008b）「支援動詞構文における事態性名詞と動詞との項共有と連結性：『日本語コーパス』を用いた分析」『日本言語学会第 136 大会予稿集』、432-437.

吉永尚（2011）「中国語話者における心理表現上の母語干渉について」『園田学園女子大学論文集』第 45 号，167-180.

〈作文分析に使用したコーパス〉

「華東法政大学作文コーパス」華東法政大学
http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~sugimura/class/corpus/zhengfa.html（2012 年）

「日本語学習者言語コーパス」東京外国語大学
http://cblle.tufs.ac.jp/llc/ja/index.php?menulang=ja （2012 年）

「日本語学習者による日本語作文と，その母語訳との対訳データベース オンライン版」国立国語研究所 http://jpforlife.jp/contents_db （2012～13 年）